



「こもれび」のシンボルツリー、イヌシデ

今回は「相模原こもれび」の当初からの活動地であり、集合場所でもあるA地区のシンボルツリー、イヌシデ(犬四手)とその仲間です。

イヌシデはカバノキ科クマシデ属で仲間はアカシデ、クマシデ、サワシデ(サワシバ)、イワシデがあります。

名前の由来はシデ類の花穂の垂れる様子が玉串や注連(シメ)に垂れ下がる紙に似ることによります。

イヌシデは雑木林の中ではすらりとした樹形で肌がつるりとした灰白色でコナラやクヌギのごつごつした姿に比べると女性的といえます。

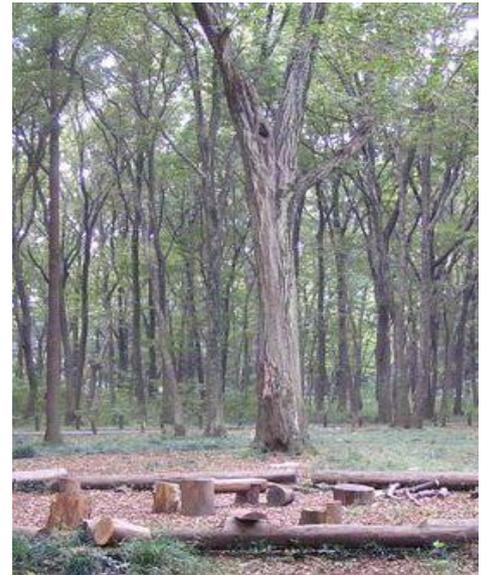
岩手県、新潟県以南、四国、九州までに分布する落葉高木で秋になると黄葉します。

コナラやクヌギには萌芽更新の能力がありますが、イヌシデは萌芽更新は苦手で翼(果苞)のついた種子が風で飛び各地に広がっていきます。

シンボルツリーのイヌシデは幹回り(胸高)2m70cm、樹高は20m以上(目測)あり、「相模原こもれび」が最初に活動を始めたのがイヌシデ広場を含むA地区エリアですが、当初はスギ、ヒノキ類の針葉樹を中心とした暗い場所でした、間伐により、明るい場所に変え、現在では活動の集合場所やこもれびの森の散策者の憩いの場所として利用されています。

シデの仲間の見分け方は、イヌシデの葉は長さ4~8cm、側脈は12~15対で、アカシデよりやや大きく、樹皮は縦に浅く白い線が入り、老木では浅い割れ目が入ります。アカシデの葉の長さ3~7cm、側脈は7~15対とイヌシデよりやや小形、樹皮は凸凹があり、幹の断面が不規則です。老木になると筋状のくぼみが目立ちます。クマシデの葉の長さ5~10cm、側脈20~24対で、樹皮には縦にみみずばれ状の模様があり、老木になると模様部分から裂けます。サワシデの葉は長さ6~15cm、側脈は15~23対で大形、樹皮はなめらかで老木はひし形の浅い裂け目が入ります。

イヌシデの材は白さを活かして木の玩具や装飾用の床柱などに使われるのが特徴です。(林)



イヌシデ広場のシンボルツリー



イヌシデの葉



クマシデの葉



アカシデの葉



木もれびの森の野鳥たち

———— 野鳥たちの夏のくらしは・・・ ————

子育ても終盤。幼鳥たちも地力をつけ、親別れ・子別れの時を迎えます。

換羽: 子育てが一段落した親は換羽に入ります。痛んだ羽毛を全身抜け変わらせます。羽毛が生えそろうまでは、飛ぶ力が落ち、とても危険です。この間、良く繁った林の目立たないところで、ひっそりと暮らします。

食事: 食べ物メニューは豊富。何といても昆虫の季節、セミ、バッタ、チョウ等々。セミは地面からはい出るや、待ち構えていたカラスに狙われ受難です。

木の実も少しずつ色づき始め、ミズキ・ウワミズザクラなどはさっそく鳥たちのレストランに。

水場: 雨上がりの水たまり、アオゲラやシジュウカラなどが順に水浴びに。樹洞に溜まった雨水は命の水。小さなメジロはその洞で水浴びもします。(瀬尾)



巣立ち直前のシジュウカラ

森のきのこ「ウオッチング」

皆さんが作業場でよく見かける「カワラタケ」属のきのこ、ある日突然生えてくるような気がしますが、実は森の地中に広範囲にわたって菌糸をはりめぐらし、落葉や枯れ木を分解して栄養を吸収しながら、1年中生存しています。

きのこは、秋に生えるものと一般的に思いがちですが、春と秋に菌糸を集結させて、きのこの状態が出来るのではないかとわれています。

木もれびの森を彩るきのこの数は計り知れず、観察にはうってつけの場所なのです

きのこの生育する環境豊かな森の中で地表に限らず枯れ木・低木・落葉の上・草地・針葉樹の下・荒地とさまざまところに顔を出します。

森の中にくまなく視野を広げ、散策途中に「きのこウォッチング」を楽しんでみてはいかがでしょうか。

注意として、どんな美しいきのこも美味しそうに見えるきのこも、野外で採集したものについては食べることは、極力避けるほうがいいでしょう。

きのこを見つけた時「これは食べられるか」「食べられないか」でとらえるのではなく、「森の不思議な生き物」として観察してみるのの方がいいのではないのでしょうか

写真は全て木もれびの森の中のきのこです。名前を特定する事が難しい種類も少なくありません。会員さんの中できのこに興味をお持ちの方がいらしたら、一歩ずつ森のきのこを勉強していきませんか。

*（相模原市発行の「市史・自然編」の中で、きのこ類は「菌類」に分類されています）（野口）

木もれびの森で見つけたきのこの写真



